

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	去るに當りて : 寮部報
Author(s)	尾木, 文之助
Citation	龍南, 253 : 71 - 73
Issue date	1943-07-20
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8555
Right	

その岐れ目の深い遠い碧。

線の肌の五つの峰が

紫のヴェールを被る。

濃白の自然の乳が

その巔きにのしかより

山は眠りに入る。

永遠に平和の姿に山は眠り

雲が自由と漂泊の子守唄を歌ふ。

山が暮れる

密立した杉の梢の上を

飄々と夏の想ひ運ぶ南の風。

露を結ばぬ山の草が

感傷と浪漫に揺れ、

郭公のたそがれの唄が流れる。

放れの牧牛の迎る稜線の上に

窈窕の夢の金星が浮ぶ。

山が暮れる

(阿蘇道場にて)

去るに當りて

前總代 尾 木 文 之 助

寮を去るに當り靜かに過ぎ去りし二ヶ年半の寮生活を反省し、且つ又寮の現状を直視する時そこに鬱勃として起つて來る感傷がある。寮生諸君に對しどうしても言ひたい止むに止まれぬ氣持に驅り立てるものがある。一言自分の体験せる寮生活の實相よりして敢て寮生諸君に訴へたい。

高校生活、それは眞摯激烈たる若人の力強き結合でなければならぬ。その底に流れるものは飽く迄若人らしき清き報國の至情であり眞劍なる、何物にも屈せざる、何物にも妥協せざる強さであるべきである。然るに高校の現状は如何。他校は知らず天下第一等と誇つて止まざる我が龍南習學寮は如何。

近時世の高校に對する壓迫の強く、吾等の時局認識不足を非難するの聲の-highは、只に世人の無理解にのみ起因するものであらうか。吾等のこれに對して執りつゝある態度は果して龍南人らしきものであらうか。世人の無理解は悲むべきであるが、識者の吾等の生活の赤裸々なる姿を見る時、果して深き信頼を感じ、邦家の將來に無限の希望を感じ得るであらうか。吾等はいかゝる非難に對して美辭麗句の限りを盡して高校生活、寮生活を讚美し揚言し勝ちである。自分はこの態度に對してはその氣持も良く分るし、この事を責めるのではない。が、他に對する揚言を繰返す中自身自身過信して了ひ、嚴格なる自己反省を怠り己が長所のみ着目

し、その欠に故意に目をふさぐが如き態度に陥るものあればそれに越した愚は無く、世俗に超然たりと稱して、己の都合よき事のみ世俗を超越し、身に不利を感じては俗界と協調するものありとすればそれは最も卑怯な存在である。諸君果して現在の龍南にその傾き無しと斷言し得るか。

我等が揚言し讚美し止まざる龍南生活が果してその實をあげつゝあるか否かを考へる者すら尠き現狀では無いか。徒に思ひ上つた態度は捨てよう。龍南生活とはこんな生活ではなかつた筈だ。

「龍南だつて人間の集りだよ」と言へばそれ迄である。人間の集りでありながら尙普通の人間生活なる觀念以上の生活をやつてのける。そこが龍南の生活ではないか。自分は余りにも龍南人に理想主義者のすくなく、現實妥協者流の多きを嘆く。かのニーチェが奮起せし如く、かくの如きが龍南生活なりしかと眞摯痛烈なる反省を加へ、更に「よし今一度」と理想に燃えて踏み出でんとする者の如何にすくなきことか。勿論、理想通りの龍南生活が現在實現されるとは思はれぬ。無理矢理に理想生活を築き上げんと進む時、そこには必ず反對あり反感あり冷笑がある。然しそれに對し必死で突き進んで行くのが若人であり龍南人ではなからうか。反對、冷笑を察知し、良心を麻痺せしめて巧に生き抜く者は利口である。現在龍南にくつついでゐる腐敗バクテリアの最たるものはこの余りにも多き利口者である。要は眞剣さの問題である。龍南人になる矜持と氣魄の問題である。

諸君靜かに過ぎ來し三月の寮生活を反省せよ。果してそれは諸君の理想の生活であつたか。日本の中心生命としての自覺と矜持

の生活であつたか。責任を他に轉嫁するなかれ。世人に、文部省に、「生徒課」にのみ罪を荷する勿れ。吾等が如何なる生活を送るかは自己の態度如何に懸つてゐる事である。反省を忘れた時退歩は始まる。思ひ上つた時その人の價値は無くなる。自己辯解こそ吾等の最も警戒すべき病菌である。眞剣なる反省こそは我等の須臾も忘るべからざるものであり而も最も怠り易きものである。

山本元帥戦死の報を聞いた前線將兵は低く頭を垂れくようしくと呟いたと云ふ。この短いくようしくの一語は他のいかなる強い言葉も以て表現された決意にも優つて自分の胸を突いた。俺達の生活には余りにもこのくようしくが無いのではないか。俺達はよくくよし頑張るぞ！やるぞ！と言ふ。だがこの言は余りにも輕々に發せられ、余りにも果敢なく消へ失せて了ひ勝である。自分は寮生活において幾度かやるぞと誓ひ合つたし、皆で涙を流す場面にさへあつた。しかしその後の生活はそれによつてどれ丈の變化があつたであらうか。唯一つ大東亞戰の勃發の時のあの緊張と決意とはこのくようしく的な力強さはあつたけれども。俺達は若い。若い故に感激し易くもあれば涙も出る。だが些か涙を安賣りし過ぎる傾向はないだらうか。涙をして涙のみに終らしめてゐるのではなからうか。男の流す涙は血涙でありたい。本當に勝つてゐるからにじみ出て來る涙こそ男の涙である。徒に言葉の興奮につられて、然り感激と言はんよりは興奮によつて徒に流涕し、興奮より醒むればケロツとして終るが如きは男子として恥づべき態度である。

寮生活において今一步沈潜したところが無ければならぬ。低く

低くくようしつと頷くところが無ければならぬ。わつと湧き立つ感激は、醒めるのも亦速い。深くく肝に銘すべきである。くようしつこの強い決意は眞剣な、必死の生活をしてゐる者のみに見られるものである。

表面はそうでも無いが、その人に對する時何かしら壓迫を感じ力強さを感じる。そう云つた人が龍南人に段々無くなりつゝある。これこそ龍南人の最大特色であつたと思はれる。こういふ人が剛毅木訥人であり、大きい人、強い人ではあるまいか。こんな人とそくようしつと頷けるのだ。

寮生諸君よ氣魄を出せ、まだほんのこの前龍南生活を始めたばかりではないか。夢を捨てるな。現實と妥協するな。信念の命ずるまゝに行動せよ。深くく生活を反省し、深くく決意を固めよ。「かくの如きが龍南生活なりしか、よし今一度」と。

龍南習學寮を深く愛し且つ天下に誇るが故にこゝに暴言を逞うして寮生諸兄に訴へる次第である。意のあるところを汲まれ、更に精進されんことを切願して筆を擱く。

習學寮のことども

前惣代 佐川敏明

五高に入つてから卒業までの殆ど全てを送つた寮に就いて思ふことは限りなく續いてゐる。入寮當初の喜びも、上級生諸兄の親切なる世話振りも、第一學期の臨時試験に冷え乍ら勉強したこと

も、皆何だか夢の様である。その頃の若い潑刺とした元氣は今何處にあるのかその行方が分らぬ様な氣がしてならない。酒を飲んで暴れた人も、踊り狂ふた人も駄辯りつゞけた若き哲學者も卒業の準備に忙がしいのだらうか、それとも新らしき生命の把握に向つて出發したのであらうか。殆どその面影を見ることは出来ない。

寮は若き生命の彷徨の場所だ。灯を求める數百の魂は隣の魂に導かれ或は隣の魂と喧嘩をして之を卻け乍ら灯の方に近づいて行かねばならぬ。純眞なそして正直な魂のみがその旅を面白くそして甲斐ある行程をたどることが出来るのだ。夢をはらんでこちらに迷ふことが出来るのも若人のみに許された大きな人生の旅である。夢に生きてその中を歩き続け、その中を走り廻り力盡きて倒れることだ。そしてその夢の放浪性は一生の間、死の瞬間に至るまで保持されねばならぬ。人間は地上の巡禮者たる以上の、何者であり得ないのだから、大きい夢を抱いて手足を伸しきつて旅を終るべきである。

眞に人間を感じるのも、他人を直ちに自己の心に感じるのも、この若き日以外の時に於てはあり得ないだらう。偽らざる嘘のない生活を存分にやれるのも若き人達の間に於て可能ではあるまいか。哲學も宗教も、藝術も、何も無い。ただ人間があるだけである。それらのものを最高度に表現し得る生きた人間があるだけである。その息吹が哲學であり、宗教であり藝術ではあるまいか。

「樺花咲く南國の」と口吟み乍ら武夫原を逍遙してゐる若き心に生命の永遠を感じる力があり、力に無限の信賴を置き得るだらう。